半獣の友

景雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半獣の友

【Ｎコード】
Ｎ６９００Ｔ

【作者名】
景雲

【あらすじ】
申し訳ありません。前作の短編『半獣の友』の続きです。慶国を舞台にした祥瓊と桓タイの物語です。
短編と連載を一つにまとめたものを新たに投稿いたしました。内容は全く同じです。ややこしくなってしまい読者の方には大変ご迷惑をお掛け致します。

2

祥瓊はしゃがんで頬杖をつき、しばらく巨熊の寝顔を見つめていた。これが桓タイなのかと思うと、少し違和感を覚える。

かつて祥瓊は、半獣を嫌っていた。母国の芳では半獣は差別されていた。それというのも祥瓊の父である先王が、半獣に対する法を設けていたためだ。

あれはまだ父が峯麟の選定を受けていなかった頃だった。

父と母と里（街）を歩いて市場見物をしていたとき、一匹の半獣とすれ違った。それは一切衣をまとっていなかった。

―気味が悪いわ…。

はっきりとそう思ったことを祥瓊は鮮明に覚えている。

「祥瓊、あんなものを見るのではありませんよ。」

母は露骨に顔をしかめて祥瓊に言った。

「はい、お母様。」

幼い祥瓊は素直に頷く。

「まったく。どうしてこういう場所で人の形をとらないのかしら。しかも裸だなんて。公衆のいい迷惑ですよ。ねえ、あなた?」

母は父に同意を求めた。父は大いに頷き、

「全くその通りだ。いくら本人の望まぬところで、半獣として生まれてきたからとしても、大衆の面前では人の形をとり、きちんと衣服を身に着けるべきだ。獣形でしかも衣を纏っていないなど堕落している証だと思うが、祥瓊はどう思うか?」「お父様のおっしゃるとおりだと思いますわ。」

祥瓊は目を輝かせて父を見上げた。祥瓊にとって、父は誇らしい人間だった。どんなことも生真面目にこなし、悪いことは悪いとはっきり指摘する。他人がそれを擁護しても、決して自分の正義感には

逆らわない人だった。
王になった後の父は、それにますます磨きがかかっていったように今では思う。
そして、ついにそれが裏目に出て、それも多大な目が出て母諸供民に討たれた。

3

祥瓊もまた、父母と同時に討たれるべきだった。しかし、恵州侯の温情により生きる道を与えてもらった。父王を諫言するどころか、芳国の民が次々に罪なき罪によって刑場へ引き出されてゆくのを、つゆとも知らず宮中で贅沢極まりない生活をしており、民の苦しみのことなど頭の中に欠片もなかったのに。

「本当になんてわたしは幸せ者なのかしら。」

言って祥瓊は桓タイの隣に静かに腰を降ろす。

木漏れ日が射す天気のよい穏やかな秋の季節だった。かすかにそよ風がふいて髪の毛が、祥瓊の頬を撫でる。それが気持ちよくて、思わず桓タイ同様仰向けになって空を見上げた。手入れされた地面の草がくすぐったい。

祥瓊は、生かされた後柳国で半獣に出会った。名を楽俊といった。初対面の印象は言うまでもなく悪かった。宿でやむなく一緒になって食事をした。

その後、供王に追われていた祥瓊を彼は助けてくれたが、隣を歩くのも嫌だった。

しかし、自身の罪と愚かさを楽俊に思い知らせてもらっていくうちに、半獣に対する差別心などどこかに行ってしまった。

そう、半獣もそうでない者も、等しい存在なのだと。

そして、景王に会いたくて、会えなくてもその王の造る国が見たくて、楽俊の援助のおかげで慶国に入った。そこで何かの縁だろうか、不思議なことにまたもや半獣と知り合った。名を桓タイといった。

4

祥瓊は隣で静かに眠っている桓タイに目を向ける。芳国を出てから立て続けに二人の半獣に出会ったなんて、なんという巡り合わせだろう。

もっとも桓タイと初めて会ったときは彼が半獣だとは思わなかったが。楽俊と違い桓タイは獣形をとることがほとんどないからだ。

彼が半獣だと分かったのは、和州の乱の折だった。

「軽蔑するかい？」乱が収まった後、桓タイは言った。その顔はやんわりとしていたけれども、どこか自嘲するふうだった。

拓峰の整理をしていた祥瓊は、少し一休みにと歩墻に上がって慶国の国土を見つめていた。そこへ桓タイが同じく歩墻へ上がってきた。祥瓊の姿を見つけると、ゆっくりとこちらへ向かってくる。少しうつむき加減の彼の様子に不思議に思いながらも、祥瓊は桓タイのほうへ笑みを浮かべて歩み寄った。

そして二人で慶の空を眺めているところだった。

祥瓊ははっきりと首を振る。

「だが祥瓊は芳の元公主だろう？」

半獣を受け入れる国がいくつもないことを当の半獣たちはよく知っている。見ると桓タイは首を少し傾け、複雑な微笑を浮かべている。

もう一度祥瓊は首を振った。そして真っ直ぐに桓タイの目を見る。

「確かにわたしは、少し前までは半獣が嫌いだったわ。」

桓タイは真剣な表情で見返してきた。

その真摯な瞳に、祥瓊は慶国まで旅をして来た経緯を洗いざらい話した。

「わたしはとても愚かだったの。罪深いの。桓タイは半獣だけど何も悪いことをしていない。でも忌み嫌われる。わたしは半獣ではないけれど愚かで罪深いことをしてきた。でも少なくとも宮中にいる

間は嫌われなかった。それって間違っているでしょう?」
祥瓊の問いに桓タイは無言のまま見つめる。　祥瓊は口をつぐんでしまった。軽蔑されるべきなのは自分のほうだ。
　ややあって、桓タイが口を開く。
「主上は、俺が仕官したいと言えば、お聞き届け下さるだろうか……。」
桓タイは堯天山のほうを仰ぎ見た。今、景王陽子は祥瓊や鈴と同様拓峰にいて、乱の後片付けをしている。
　しかしながら本来は堯天山の頂上、雲海を貫いた場所にある王宮、金波宮にいるはずだ。だから彼は、そこへ目を転じたのだろう。
くすりと祥瓊は笑う。それに桓タイは驚いて祥瓊を振り返った。「陽子に半獣に対する差別心なんか、かけらもないわ。」
「なぜそう言い切れるんだい?」
心底驚いているふうの桓タイの表情が少しおかしくて、慶国まで来た経緯の話の中で出会った半獣が、他ならぬ景王陽子の友達であることを話した。
「そういうことなの。桓タイ。陽子は半獣だろうとなかろうと全然頓着しない王だわ。」
言って祥瓊は再びくすりと笑う。
「ちなみに王だろうがそうでなかろうが全くこだわっていないみたい。…ああでも、私は至らない王だって何度も自分を責めていた…。」
桓タイはじっと祥瓊の顔を見つめている。その瞳は真剣だった。
「わたし、わたしは愚かで世の中のことが何も分かっていなかった。だから今からでも勉強したいと思ってるわ。でもそれは叶わないと思う。」
祥瓊の言葉に桓タイは目を見開いた。
供王の御物を盗んだ。そうなると重い刑罰が下される。でもそれは覚悟しなければならない。
　祥瓊はゆっくりと目を閉じて俯いた。

「軽蔑されるべきなのはわたしのほうよ、桓タイ。」
泣きたくはないのに目頭が熱くなり、祥瓊の頬を一筋の涙が流れた。
目を閉じた祥瓊に、今の桓タイの様子は分からない。
けれど、肩に温かなぬくもりを感じた。
目を開けてみると、桓タイが祥瓊の肩に両手を置いている。転じて桓タイの顔を仰ぎ見ると、そこにはやんわりとした笑みを浮かべた表情があった。
「桓タイ?」
祥瓊は涙を流したまま、桓タイの顔を見つめる。桓タイは柔らかな笑みを浮かべたまま、祥瓊の目をしっかりと覗きこんだ。
「俺が仕官できたとき、主上にお頼みしてみよう。」
「頼む?何を?」
「祥瓊を主上のお側におけないか、その為に俺が芳国に行って今の祥瓊の様子や和州の乱での働き、特に禁軍が来たときは祥瓊のおかげで助かったんだ、そのことをつぶさに話す。そしてこのことを供王にもお伝えする。」
祥瓊は目を見開いた。その涙に濡れた瞳に、桓タイは目線を合わせる。
「祥瓊は確かに供王より罰を受けなくてはならない。しかし今の祥瓊のことをお伝えすれば、減刑されると思う。そうしていただきたいと、俺はお願いする。」
「そんな……。桓タイに悪いわ。」
なんの、と桓タイは無邪気に笑った。
「俺は祥瓊に手助けしてもらったんだ。だからそうさせてくれ。それに、祥瓊には堯天にいてほしいと思う。」
「どうして?」
「それは主上が手放したがらないだろうからだ。」
きっぱりと桓タイは言い切った。
それに対して、祥瓊は迷う。心の中に、桓タイに甘えそうになる自分と、それは駄目だと拒否する自分とがいる。祥瓊は胸を押さえ

た。依然として桓タイは祥瓊の肩にあたたかな手を置いている。

自分は、どうすれば、いいのだろう……。

5

祥瓊は秋の風を心地よく感じながら、目を閉じた。隣には桓タイの気配がする。正確には熊の気配、か？

くつくつと彼を起こさないように祥瓊は笑みを漏らす。

―わたしは、やはり、幸せ者ね。

今日一日で何回思ったか、祥瓊は今度は苦笑する。

あの頃、本来ならば一等重い刑罰を下されるはずのところを、無罪に処せられたようなものだった。

胸を押さえ、眉根をよせて再び俯いた祥瓊は、桓タイのやさしさが身に余り、心が傷つけられた気分がしていた。

―こんな愚かな人間が、こんなあたたかな優しさを受けていいの？

それもつい最近まで半獣を嫌っていたのに。「祥瓊―。」

「桓タイ。」

桓タイが何かを言う前に、祥瓊はしっかりした声音で、顔を上げ、桓タイの瞳を強く見る。

「桓タイ、ありがとう。本当に感謝するわ。でもこれはわたしの問題なのよ。」

そう、これは自分の問題、公主として自らの責任と義務を果たさなかった自身の罪だ。　祥瓊の雰囲気は少しばかり変わっていた。芳極国がもと公主、孫昭の気高さだ。その気高さで、こう言い放った。

「わたくしはもと芳の公主、祥瓊である。父王と王后である母が、民に何をしているのか知らず、また、知ろうともしなかったことは、民に対する酷い仕打ちである。我は父王が民に討たれ、母王后が恵侯に殺された後も、二人が民にしてきた残虐なことを知らなかった、知る由もなかったと、言い続けていた。これは我の心が醜いということである。」

「祥瓊―っ。」

また何かを言いたげな桓タイを、祥瓊は首を振って制す。

「我は、恭国へ行かねばならぬ。

なぜなら、父王を母王后を諫言しなかった。芳国の民を苦しみに陥れた。

それを知らず宮中で贅沢な暮らしをしており何一つ公主としての責任を果たさなかった。恵州侯の温情を無にし、彼を簒奪者と罵った。民の衣服を襤褸と言い、泥まみれになって働く姿を蔑んだ。

恭で供王の御物を盗んだ。

恭国を出奔し、半獣に出会ったが、差別心を持ち、忌み嫌った。

そして……、景王を恨み妬んだ。」

祥瓊は自分の心根、今までとってきた行動を並べ立てた。

我ながらどれだけ性根が醜いのだろうと思う。そういえば、恵侯も言っていたではないか。心根が醜い、と。その醜い心根を忘れてはならないと同時に、報いを受けねばならない。ならば、恭でそれにみあう正当な刑罰を受けるのは至極当然のことではないか。

「……それが、祥瓊の決断、覚悟かい。」口を挟みたかったが、耳を澄まして祥瓊の言葉を聴いていた桓タイは、言った。

祥瓊は彼を見た。彼はなんともいえない表情をしていた。

祥瓊はすでに涙を流していなかった。澄ました顔で、桓タイを見る。

しばし二人は無言で見つめ合った後、祥瓊のほうから口を開いた。

「本当にありがとう、桓タイ。貴方の厚意はとてもうれしい。」

彼女は目を細めてはっきりと言った。

「さて、整理に戻らなくちゃ。今ごろ陽子と鈴が、怒ってるかもしれない、早く戻ってきて手伝えって。」

祥瓊は桓タイに笑顔を向け、そうして歩墻を降りようとする。

桓タイに背を向けたとき、やや怒気を含んだ彼の声が祥瓊の胸を貫いた。

「お前はそれでいいのか。」

祥瓊は、足を止めた。

6

ゆっくりと振り替えると、桓タイは珍しく眉間にしわを寄せて、射るような目で、祥瓊を見ていた。

祥瓊は少し驚いた。桓タイは大抵やんわりとした笑みを浮かべた、柔らかな表情をしているからだ。軍人、という雰囲気が似合わないくらいに……。

その射るような目に気をされそうになりつつも、祥瓊はあくまで毅然とした態度で言う。

「わたしはもう、覚悟を決めたの。罪をきっちりと購うと。」

「その気持ちは分かる。だが、かりにも王の御物に手をつけたということは、大逆(たいぎゃく)に匹敵する罪に判じられることもあるんだぞ。ただの窃盗とは違う。実際どう判断されるかは、供王とその秋官の気分しだいだ。」

桓タイの声音は怒っているようだけれども、どこか切実だった。彼は自分の言っていることが、祥瓊には先刻承知であることは、分かっているのだろう。

それでも、言わずに、いられない—。

祥瓊はそう思うと、不意に桓タイと過ごした日々を思い出した。短い間だったけれど、今では、すごく良い思い出。供に闘った。その闘いが終わって、こうして二人、無事に生きて話している。

祥瓊は再び桓タイに背を向ける。

—罪を悔いても、罰は、受けなければならない……。

祥瓊はひとつ息を吐いて、芳国の、父峯王の王朝三十年の真実を語る。

「楽俊が言っていたわ。峯王は、父は、どんなにささいな罪でも許さなかったと。物を盗んでも、田畑を放り出して芝居を見ても、死罪を賜(たまわ)る、と。餓えに苦しみ一個の餅を盗んでも死罪だったし、刑吏(けいり)に石を投げただけでも死罪、花鈿（花飾り）を付けて街に出ただ

けでも死罪……、そんな国だったの！芳は！そんな国にしたのは誰？父？それとも母の父への讒言（ざんげん）？そうかもしれない。でも、わたしだって芳をそんなふうにしたのよ！」

祥瓊は自身の爪で手の平を傷つけるくらいに両のこぶしを握った。彼女の心は、悔恨や自責の念、罪悪感、そういった感情でいっぱいになる。

「だから…！」

祥瓊がまだ何かを言おうとしたとき、背後から腕が回されてきた。

「…か、桓タイ！？」

祥瓊は驚いて硬直してしまう。

桓タイは、祥瓊の身体に触れないように、彼女の肩に手を回していた。そうして柔らかく問う。

「俺は、半獣だ。少し前の祥瓊なら、半獣にこんなことされてどう思ったと思う？」

頬にかすかに朱を昇らせて、祥瓊は答える。「……すごく、嫌、だった……。」

「なら、今は？今はどう思う？」

桓タイの声音は確実に切なげだった。

―ああ。

祥瓊は彼の手を握る。―この人は、ずっと差別されてきたんだわ。

桓タイの手は、とても軍人とは思えないほど繊細だった。指は細く長くて、手の甲には細い筋が浮き出ている。

背中にかすかに感じる身体の線は、細かった。

それでも、巨熊の半獣だから、尋常でない怪力の持ち主なのだ。

それを差別してどうする？忌み嫌ったところでどうするというのだ。この世界には半獣という人がいる。半獣として生まれてきたというだけで、どうして嫌いにならなければならないのだろう。

「わたしは、今は、半獣が好きよ。」

祥瓊が率直に答えると、桓タイは祥瓊の手を握り返してきた。

「ありがとう、祥瓊。」

桓タイの声は柔らかかった。
そのままの体勢で、桓タイは言葉を続ける。
「そう、思えるようになったということは、お前は、お前の考えは変わったんだ。なのに、人生を恭国の牢の中で終わらせるのかい？」
「それは……、でも、罪は購わなくてはならないから。罪を犯せば、きちんと罰を受けなくては…。」
言って祥瓊も心が震えた。
桓タイ、楽俊、鈴、柴望、労、虎嘯、夕暉、遠甫、景台輔、そして――、陽子……。ほかにもたくさんの人が自分を仲間だと受け入れてくれた。
しかし、別れを告げねばならない。
そう思って胸がつぶれそうになったとき、桓タイが柔らかく言う。
「祥瓊、お前の気持ちも覚悟もよく分かった。あ、いや、俺みたいな単純なやつには分からんか、すまん。しかしだな、この乱の後すぐに恭へ罰を受けに行くこともあるまい。まだ猶予はある。俺たちとしばらく過ごさないか？主上も大変祥瓊のことをお気に召しているようだし。何も急ぐことはない。主上はどうやら、身分に頓着なさらないお方のようだ、俺たちのようなものにも頭をお下げになる。だから、主上と鈴と祥瓊と、仲の良い三人組に見えるぞ。」
桓タイはそう言って笑った。
そして祥瓊の肩に回した腕を解く。
祥瓊は振り返り、桓タイとまっすぐに対面した。そうしてその瞳を見つめる。
桓タイは笑んで、祥瓊の紫紺の瞳を見て軽く頷(うなづ)いた。
祥瓊もまた、大きく頷いた。

7

いつの間にか夕暮れ時になっていた。夕日が乱によって殺伐としてしまった、拓峰の街を照らす。

歩墻にたたずんで、祥瓊も桓タイもその光景を見下ろした。痛ましいそれをしばらく見つめ、祥瓊は桓タイに目配せして歩墻を降りていった。

祥瓊は走って郷城へ戻った。陽子が自分に街の人々が平伏するのを嫌がったので、鈴と祥瓊も彼女とともに城にこもって、そこの整理や怪我人の手当てをしていたのだ。

本当に陽子は、身分に頓着しないと思う。

城の外で整理をしていたとき、街の人々は歓喜の表情を浮かべながら陽子のところへ駆け寄ってきては彼女の足元にひれ伏し、お礼の言葉やら出会えた喜びやらを語っていた。

そういうとき、王たる者ならば彼らを見下ろし、

「礼など及ばぬ、全ては私の至らないところあっての故でこのような惨事になってしまったのだ、さあ、顔を上げて休むがよい。長い間虐げられて来たのだから。」

というような応対をするものではないだろうか。

ところが陽子は逆に街の者に深々と頭を下げていた。そして慌てたように、

「いいや、私が不甲斐ないばかりに本当に貴方たちに苦労をさせ、悲しい思いをさせてしまった……。本当に、申し訳ないと思っている。」

と言い、彼女はしゃがんで彼らと目線を合わせようとする。

その王らしくない以外な態度に、街の者たちは思わず顔を上げぽかんとしていた。

さらに陽子は顔を上げた人を立たせて、休んでくださいと言いつ

つ城へと促していた。　祥瓊は半ば呆れた。これでは王の意義も何もないではないか。しかしそう思いつつも半ば嬉しかった。あれほど会いたかった景王が、真面目で、民の目線に立って物事を視ようとする娘であるということが。

祥瓊はあらためて心の中で楽俊に感謝した。彼に出会っていなければ、今でも景王を―陽子を恨んでいただろうから。

でも今は違う。

自分は景王陽子の友達でいたい。

それに、桓タイとも――。

「ずっと戻ってこなかったから何かあったんじゃないかと思ったわよ。」

郷城に戻ると、真っ先に鈴が心配した表情で駆けつけてきた。その大きな瞳にわずかながら涙が見える。目一杯心配してもらえたのだと思うと、胸が熱くなった。

祥瓊は慌てて詫びる。

「ごめんなさい。ちょっとね、桓タイと話してて。」

鈴の背後を見ると、陽子も片付けをしていた手を止めて、心配そうな顔をしてこちらを見ていた。

「陽子にも、心配かけてごめんね。」

言うと、いいや、という短い返事とともに、ほっとしたような微笑が返ってきた。

少しして、王師が戻り、遠甫が無事に戻ってきた。

正門へ向かい、小さなその老人を陽子は丁寧に出迎え、話をする様子を、祥瓊は角楼で鈴とともに見つめていた。　あのご老人が柴望とその上の方、浩瀚、そして労の師なのか。名前は聞いて知っていたが、実際に姿を見るのは初めてだったので、聡明で深遠な知識をお持ちの方だなというのが第一印象だった。

「…老松……。」

ぽつりと鈴が声を漏らした。祥瓊は弾かれたように鈴を見る。

「鈴、あの方は……。」

―まさか、あの方は。鈴は角楼から身を乗り出すようにして、その老人を見ながら言う。「ねえ、祥瓊。あの人、麦州産県支錦の……、伝説の、飛仙なんじゃ……？」

問われても祥瓊にだってわからない。けれどその可能性は高い。

その伝説は桓タイから聞いた。昔、その地に降り立った徳の高い老松という字の飛仙があった、その飛仙は野で道を説いたと。しかし今では伝説になっていると。だが、昨年焼き討ちに遭った松塾の教師に、あのご老人がいた。松塾は“学”ではなく“道”を教えていた。しかも和州侯呀峰の命令で遠甫の里家が襲われたとき、彼は“殺されずに”さらわれた。そう考えるならば、彼は仙だ。襲った連中は簡単に殺せなかったのだ。つまり遠甫は、その伝説の飛仙、老松だ。けれど間違っているかもしれない、自分の考えは。合っている可能性のほうが低い。

しかしよく見ると彼はそこらの人間にはない雰囲気を漂わせている。

祥瓊はそう言って感慨深げに目を細めると、隣で鈴が深く吐息をついた。

「陽子は、老松…遠甫に教えを受けていたのね…。」

「そうね……。」

祥瓊もまた、軽く息を吐いた。ふと祥瓊は思い付く。

「陽子は遠甫の正体を知っていたのかしら？」

鈴は祥瓊に向き直る。「それはあり得ないわ。だって麦州侯を罷免しちゃったのよ？」

言って苦笑した。

「ああ、そうだったわね。」

祥瓊もまた苦笑した。陽子―景王が遠甫の正体を知った上で、勉強しに市井に紛れて、遠甫の里家に身を寄せていたのなら、麦侯が

受けた、靖共派による罪の捏造など、とっくに判ったはず。麦侯浩瀚に対する誤解は解けていたはずだ。なぜなら彼は松塾の出身なのだから。

「どうして知らなかったのかな？」

鈴が呟くと、祥瓊も首を傾げざるをえない。知っていれば浩瀚を麦州侯から追い落としたままにすることはなかっただろうに。

そもそも陽子が遠甫の里家へ入ったところから疑問である。この世界のことや政治経済、市井のことを知りたければ他にも道はあったはず。にも関わらず遠甫―老松のもとでこちらのことを教わっていたということは、遠甫を陽子に紹介した人物がいるということだ。

だがそれはいったい誰だ？王宮の中で陽子は、傀儡だと自ら言っていた。官吏の信用がない、と。ならば諸官ではありえない。

そこまで考えて祥瓊は目を見開いた。

「……台輔だわ。」

祥瓊が呟くと鈴が、え、と声を上げた。

そう、景麒だけは陽子を無視するはずがない。例え信用していなくとも、麒麟は王に逆らえない。そういう生き物だから。陽子が、こちらのことを何一つ知らないから、街で暮らしてみたい、というようなことを言ったとき、景麒は最初は反対しただろう。何しろ登極したばかりで大事な時期だったのだから。しかし、最終的には景麒は景王に逆らえない。あるいは、陽子のことだ、きちんと景麒に動機を説明したのかもしれない。だから陽子は、景麒の理解を得、遠甫に教えを請えるよう景麒の手配で、遠甫の里家に入れてもらうことができたのかもしれない。つまり景麒は、遠甫と浩瀚と面識があったのだろうということだ。そして景麒は、遠甫の出自などは陽子に詳しく教えなかったに違いない。なぜなら陽子は麦州州侯浩瀚に対して悪感情をもっていたのだから。

そう祥瓊は鈴に言うと、彼女はなんとも言えぬ複雑な顔をした。

「景台輔って、どんな方なの？」

顔をしかめて問おてくる鈴に、祥瓊もまた口元をひきつらせる。
「わたしに聞かれても困るんだけど…。」
祥瓊も鈴も、景麒のことは全くと言っていいほど知らない。禁軍がやって来たときの、転変した姿を見ただけだ。
「お声は聞こえたわよね。」
肩をすぼめて祥瓊が鈴に聞くと彼女はうなずく。
「こう言ってはなんだけど、景台輔って冷たそうね。」
「鈴っ……！」
「だって台輔がもうちょっとちゃんと陽子に説明してれば、結果はもっと違った形になってたかもしれないわ。」
言って鈴は拓峰の街に視線を移した。その言動で祥瓊は悟る。
この和州の乱でたくさんの命が奪われた。陽子は奸臣(かんしん)を更迭することや州師を動かすことなどの権限が、ないと言っていた。普通王ならばこれらのことなどたやすくできるのに。しかし、できない、と。そんなはずはない、と祥瓊が言うと、陽子は自嘲気味に、無能だから、胎果だから、女だから、王としての権限を官吏によって制限されているのだと言っていた。
そんなとき陽子にとって頼りになるのは景麒だけだっただろう。王宮の中で、たった一人だけ信用できる僕(しもべ)――。その僕がきちんと説明してくれずにいれば、登極したばかりの王は王宮のことも諸官諸侯のことも、そして政のことも解らないだろう。ましてや陽子は胎果だ。王座のことよりまずこちらの常識から知らない。しかも慶は女王に恵まれない。これらの重苦を背負っていたのだ、陽子は。
そしてこの乱で、多くの命が亡くなった。「王さまをやるのって大変ね。」
鈴も同じようなことを考えたのか、ぽつりと言った。これに対して祥瓊は、ええ、とだけ答える。
父王を思い出した。父も陽子のようにたくさん悩んで、自らを追い詰めて追い込んで失道して、挙げ句、民に憎み恨まれながら殺さ

れた。父が悩み苦しみ、民が過酷すぎる刑罰に恐怖している間、祥瓊は宮中深奥で、何も知らず優雅に遊んで暮らしていた。今思えば、父母の反対を押しきってでも、父の政策を目にし、街に降りて民の様子を知るべきだった。その努力をするべきだった。そうすれば、父の苦しみを和らげてあげられたのかもしれないのに。祥瓊はどことも言えぬあたりを見据えた。

「本当に、玉座を維持していくのは大変なことだわ、鈴。」

「……うん。」

鈴は少し俯(うつむ)いて答えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6900t/

半獣の友

2011年8月31日03時54分発行